

体育学部が2番目に開設された所以

学校法人梅村学園理事長

梅 村 清 明

その1 体育学部増設の理由

中京短期大学商科が設置認可され開設されたのは昭和29年4月であり、昇格して中京大学商学部商学科が創設されたのは昭和31年4月であった。

何故商学部が最初に設置されたかは、言うまでもなく中京商業学校三十余年の、大きな歴史的流れによって形成されたものである。これは自然の流れの大きな結晶であった。

然らば、何故体育学部が昭和34年4月2つ目の学部として開設されたか。それは中京商業学校の強烈にして華やかなスポーツ史を知る者から言えば当然のことであった。況や建学の精神を知る学内の者から言えば、自明の理であり方針であった。

中京商業学校はそれまですでに、野球部が夏5回・春2回・秋3回、相撲部が3回、水泳部が1回、自転車部が3回、軟式野球部が4回、剣道部が1回全国優勝し、勇名天下に冠たるものがあつた。

さかのぼって、何故学園創立者は最初に商業学校を創ったかについて、一言申し述べたい。学園創立者故梅村清光先生は、水戸中学校2年終了後茨城師範学校に進んだのであるが、当時短距離競走では県下第1位であり、しかも3年生の時、水戸から札幌まで学友鈴木氏と走破した。これは当時としては破天荒の快挙であつたと言うべきである。23歳で茨城県新治郡上佐屋村尋常高等小学校長に就任したが、同年上京し文部省の中等学校、師範学校地理歴史教員検定試験に合格し、その後水戸商業学校、水海道中学校、茨城工業学校、萩中学校、愛知県立第五中学校、国府高等女学校等の教員を歴任し、大正12年40歳の時中京商業学校を創立したのである。商業学校を選んだ理由は、商業方面での人材の育成が私学として最も適切であるとの見解に由る。国家の前途と私学の特殊性を考え、更に当時すでに公言した中京高等商業学校創立との密接な関係を考えたことが主たる理由である。従としては当時愛知県に甲種（5ヶ年制）の私立商業学校がなかったことに由るものである。

再び体育学部増設を述べる。これは中京商業学校の建学の精神と現実の歴史の熱勢に基づくものであつたことは言うまでもない。

中京大学に2番目に体育学部を開設したことと、大学創立以来体育会の強化を意図したことは建学の精神に基づくものなるが故に、次に梅村学園の建学の精神を述べたい。

「梅村学園50年史」の20頁の拙稿を転記することを御了承願いたい。

中京大学体育学部は昭和46年豊田市貝津町に移転した。校地20万平方米、校舍2万7千平方米、当時まさに日本一の素晴らしい設備であつた。そして49年3月認可を得て大学院体育学研究科体育学専攻修士課程を開設した。体育学部・同大学院の研究教授の向上充実は、まさに全教職員の精進努力の成果であり感謝の意と敬意を表する次第である。

体育学部と体育会は極めて密接な関係にあることは言うまでもない。

わが体育会からは日本代表選手として、陸上競技部28名、水泳部6名、体操部6名、バレーボール部4名、バスケットボール部3名、卓球部8名、軟式庭球部4名、自転車部15名、

重量挙げ部4名等すでに多士済済であった。これが中京大学創立27年間の成果であることを考えれば、まさに日本有数の好成績であると言える。選手諸君の精進努力とコーチ各位の研究指導に衷心から敬意を表したい。

その2 建学の精神

学校法人梅村学園は、名古屋市において中京大学文学部、法学部、商学部、中京大学大学院文学研究科（國文学専攻・心理学専攻）修士課程、法学研究科修士課程、商学研究科修士課程、博士課程。中京高等学校（普通科・商業科）。中京中学校。豊田市において中京大学体育学部、中京大学大学院体育研究科修士課程。三重県松阪市において松阪女子短期大学（國文科・英文科・家政科・幼児教育科・音楽科）。松阪女子高等学校（普通科・商業科・家政科・音楽科）。松阪女子中学校（51年度より三重中学に統合）。三重高等学校（普通科・商業科）。三重中学校。松阪女子短期大学付属梅村幼稚園を運営しているのであるが、本学園創立は大正12年3月17日であり、創立者は故梅村清光先生である。

建学の精神は、創立者の教育者としての信念に基づくものであり、その要約は「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」である。

そもそも、この建学の精神のよって来たとを尋ねるならば、それは梅村家有縁の水戸学の「文武不岐」の精神に通ずるものありとされている。今を去る260余年前、享保年間に水戸藩士たる梅村家4代梅村清茂先生が、水戸の地に「清信塾」を開いて、武士の子弟教育に当たられたのであるが、この清信塾の精神が水戸学の精神たる文武不岐であったのである。

この文武不岐を「弘道館記述義」には、

「……蓋シ文武ノ道、各々小大アリ。天地ヲ経緯シ、禍乱ヲ克定スルハ、是レ其ノ大ナル者ナリ。書ヲ読ミ冊ヲ挾メ、劔ヲ撃テ矛ヲ奮フハ、是レ其ノ小ナル者ナリ。然レドモ書冊ハ道義ヲ講ズル所以ニシテ、劔矛ハ心膽ヲ練ル所以ナリ。心膽實チテ而ル後以テ難ニ臨ミ變ヲ制スベシ。道義明ラカニシテ而ル後以テ己ヲ修メ人ヲ治ムベシ。且ツ文ノ弊ヤ弱、武ノ弊ヤ愚。武以テ弱ヲ矯ムベク、文以テ愚ヲ醫スベシ。然ラバ則チ学者其ノ大ノミヲ語ッテ其ノ小ヲ忽ニスルハ、固ヨリ不可ナリ。其ノ小ノミヲ務メテ其ノ大ヲ忘ルルモ、亦不可ナリ。分ッテ二ト爲シ、又其ノ一ヲ廢スルハ尤モ不可ナリ。（中略）新ニ学校ヲ設ケ、文武ヲ合シテ一トナス。（中略）文武不岐ノ戒アル所以ナリ。……」

と説いている。

わが学園の掲げる「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」の建学の精神は、いわば、この文武不岐の真髓を現代教育の上にとり入れられたものといってよい。学術に真剣であらねばならぬことは、学問の府として、洋の東西を問わず、すべて当然のこととして要求される。ところで、わが学園は、学術と並んでスポーツによる教育を、二大方針の要として高揚しているのである。「スポーツの真剣味の殿堂たれ」の教育方針は、学術とスポーツは二つながらにして一体を志向し、車の両輪の如く人間形成、人格形成に如何に重要な役割を果たしているかを強調しているものである。ここにわが学園の独自性が存する。

次につとめて簡潔に「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」の要諦を述べることにする。今これを二つに分けて考察を進める。即ち、学術の場では、学術の研鑽と共にジェントルマンシップ（レディーシップ）を醸成する。スポーツの場では、健康づくり、身技の錬成と共にスポーツマンシップを体得する。そしてジェントルマンシップ即スポーツマンシップである。スポーツマンシップとは、1. ルールを守る。2. ベストを尽くす。3. チームワークをつくる。4. 相手に敬意をもつ。の4大綱を内容とする。

このようなスポーツマンシップ即ジェントルマンシップ（レディーシップ）を体得したものは、個人としても、家庭人としても、社会人としても、国民としても、世界人類としても、真に望ましい人間であり、このような人間教育は、如何なる国の如何なる時代においても肯定され、歓迎されるはずである。そしてこの教育方針には教育性があり、この教育理念には永遠不滅の真理性がある。

わが学園においては以上の建学の精神を、すべての学校において教育の基盤として渗透し高揚し、且つ永遠に堅持する方針である。過去55年、この建学の精神は概ね良好に実行されて来た。

少し敷衍する。人間社会においてルールを守らなかったならば、社会は混乱し成立しない。ルールが悪ければ、ルールを守りつつルールを改正すべきである。このことは殆んどの国において不可能でない。特に現代は殆んどの国が民主的国家である。よって可能である。国際問題についても、国連の強化とその民主的推進によって、現在以上に平和的共存的解決が可能になるよう致すべきである。人類にとって一番大切なことは平和である。戦争は人間の諸悪のうちの最大のものである。

以上は一般論であるが、学校教育並びに学校教育の一環としてのスポーツについて、ルールを守らなければ正常な学校教育、正常なスポーツは望むべくもなく、効果が期待されぬばかりでなく学校教育の破壊、スポーツによる負傷致死を招くことも懸念される。

競技でないスポーツでも老幼男女の差、レベルの差こそあれ、ベストを尽くす心がけは必要である。これは事故防止にもつながる。競技するスポーツにおいては、競技者の殆んどすべてがベストを尽くすことによって競技が正常に行われ、その競技の目的が達成される。スポーツ競技は参加者の大多数がベストを尽くすことによって、人間の力の極致に向かって向上し、その練習と競技の過程において鍛えられた精神と肉体は、概ね人間活動のあらゆる方面に活用される。そこに偉大な価値がある。

学術の研鑽についてベストを尽くさなければ、ましてや怠慢であっては学術の修得、学問技術の向上は望み得ない。学術についてベストを尽くす人が多ければ多い程、また一人一人が多年ベストを尽くせば尽くす程、その個人のみならず、その社会、民族、国家も人類も進歩した学術の恩恵を受けることになる。また五体満足な人々、労働適齢の人々がベストを尽くすことによって、そこから生まれた余力善用によって、社会福祉国家が成立し得る。その基盤が人間性、人間愛にあることは論を俟たない。

人間は二人集まれば、既に協調妥協が必要である。チームワークが必要である。多人数になればなる程、この心がけは必要である。これは学校教育の場でもスポーツの場でも同様である。討論することは必要である。しかし討論についての正しい結論、即ちルールを前提にした結論をつくらねばならない。その結論に基づいてチームワークをつくるべきである。大にしては民族的問題、国家的問題、国際的問題についても同様である。

学校教育におけるチームワーク、スポーツにおけるチームワークは、また上述の考えを基盤にすべきである。学校教育においてチームワークがあれば、個の働きを補完してより高次の成果を期待し得る。スポーツの場においてチームワークがなければ、正常に進行しないばかりでなく、競技においては主要敗因になる。

殆んどすべての人間は善良であり、すべての人間は存在価値がある。その存在価値とは、その人、個人としても存在価値があり、他人との関係においても存在価値があるということである。殆んどすべての人は何等かの特長を持っている。殆んどすべての人は、その特長を伸ばすコースを進めば素晴らしい力を発揮することが出来る。何れにせよ、やがて職業を得て、

その職業の積み重ねの後には、その人の特長になる場合が多々ある。世の中はいろいろな特長ある人々、色々な職業を愛する人々の集合体であってこそ、その集合体は幸福な集合体となり得る。そして、それ等の人々は各々が人生コースを進む。年を経るうちに、より立派な人柄を形成する。このような意味においては他の人に対して敬意を持つべきである。軽視すべきでない。まして蔑視すべきでない。

グループ対グループの場合、国家対国家の場合もお互いに全体的に相手に敬意を持つことは肝要である。そうでない場合、後者の国家対国家の場合は、戦争の遠因になる。グループ対グループの場合は度し難い対立になる。

学校教育においても学業成績の悪い学生、生徒、児童に対して劣等視したような心を持つことは、教育者として恥ずべきである。学生、生徒、児童相互間においても相手を劣等視した心がないように指導すべきである。このような精神がなければ、教育ではなく教育を破壊することさえある。やがてどのように伸びて行くのか、またどのような業績を残す人になるのか、学生、生徒、児童の時代に、それを予知することは不可能に近い。要は教育者は、教え子に対して常に自尊心を持つよう、常に光を与えるよう心がけるべきである。スポーツの場で相手に敬意を持たなければ、況んや反対の精神があるとするならば、正常なスポーツは成立しない。極端な場合には、競技にあらずして喧嘩になりかねない。

以上スポーツマンシップの4大綱について若干敷衍したのであるが、このスポーツマンシップ即ジェントルマンシップ（レディーシップ）であることは既述した処であり、要はスポーツマンシップが本学園教育の基盤であり、そこに本学園の私学としての貴重な独自性があることを確認し、我等は我等の建学の精神の永遠の進展を祈念しつつ努力する次第である。